

聞くことから  
始めよう！

やる気を引き出し、  
意欲を  
高める評価

Giving  
Students  
a Say

マイロン・デューク 著  
山崎その・吉川岳彦  
吉田新一郎 訳

✿ さくら社

Myron Dueck  
Giving Students a Say

Smarter Assessment Practices to Empower and Engage

Copyright © 2021 ASCD

This work was originally published by ASCD.

Translated and published by SAKURA-SHA K.K.

with permission from ASCD.

This translated work is based on *Giving Students a Say:*

*Smarter Assessment Practices to Empower and Engage*

by Myron Dueck.

© 2021 ASCD. All Rights Reserved.

ASCD is not affiliated with SAKURA-SHA K.K.

or responsible for the quality of this translated work.

Japanese translation rights arranged with ASCD

(Association for Supervision and Curriculum Development)

through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

|     |                           |     |
|-----|---------------------------|-----|
|     | 訳者による前書き                  | 4   |
| 第1章 | エレベーターピッチ                 | 7   |
| 第2章 | 生徒中心の学習目標を生徒と共につくり出し、共有する | 37  |
| 第3章 | パフォーマンスの評価にはルーブリックを使う     | 81  |
| 第4章 | 公正で納得できる評価システムをつくる        | 151 |
| 第5章 | 生徒の自己評価 「数字よりも大事なもの」      | 209 |
|     | おわりに                      | 273 |

## 訳者による前書き

今、私が勤務している学校には、いわゆる通知表がありません。定期考査による点数評価もありません。代わりに記述式の評価があります。一見すると、これはすばらしいものに見えるかもしれませんが。とりわけ、本書を手にとってくださった方々にとっては。

記述式の評価では、その生徒の強みや弱みを丹念に書くことが可能になります。「あなたは八三点、きみは四七点」などと点数だけを突きつけることをしなくてすむのです。三年前、ドイツでの留学生生活を終え、現勤務校で働き始めたとき、文章による評価はすばらしいものに見えました。今でも優れたやり方だと思っています。しかし、実際に運用されている現場に入り、自身でも「評価」をするうちに、「これはプラスだけではないぞ」ということを考えるようになりました。評価の観点が明確でない記述は、評価者の主観的な「感想」に陥る可能性があるからです。

本書の著者であるマイロン・デューク先生は、意味のある「評価」とはどんなものかを実践を通して考え、多くの研究や書籍、人々から学び、それを自らの現場で試してきました。本書では、そうやって選ばれた実践、考え方が紹介されています。ざっとあげてみるだけでも、「自己評価のもつ力」「生徒とともに学習目標をつくる方法」「(日本でもやると注目されてきた)ルーブリックの意味と使い方」「100点満点評価の問題点」「生徒による自己報告の方法」など、広い範囲

をカバーしています。

もちろん、これらの新しい実践がすぐに受け入れられてきたわけではありません。本文中にも「(評価方法の変更について)多くの疑問や懸念が生まれました。また、同僚との困難な話し合いもたくさんありました」という述懐があります。でも、デューク先生はあきらめません。さらなる向上を目指す不屈の精神、そしてバランス感覚をもちながら、前に進むうとしています。そして、その根底には、「生徒の声を聞くことから始めるべきだ」という信念があります。

この本は、教育現場で日々授業をする先生たちのためのものです。そして、実は優れたブックガイドでもあります。「超一流になるのは才能か努力か?」「平均思考は捨てなさい」「逆転! 強敵や逆境に勝てる秘密」「ファスト&スロー」など、学びや評価に関する名著のエッセンスが味わえる本でもあるのです。

そうだ、言い忘れていました。デューク先生はスポーツのコーチでもあります。そのため、評価の射程は座学に留まりません。スポーツ競技における評価の困難さ、そして優れた才能を見出すための視点についても、豊富な例を用いて詳述されています。体育の先生はもちろん、運動部の顧問の先生も大いに刺激を受けることでしょう!

なお、原書がそれだけ広い範囲をカバーしているため、初期の訳稿は三五〇ページ強の分量となり、ほんとうに残念ながら原書の第四章「継続的な評価に生徒が参加する」ほかをカットせざるを得ませんでした。ちなみにカットした「第四章」では、生徒にとって意味のある「テスト」

とはどういったものか、生徒についての教師の認識と「テスト」が食い違う時にどう対応すべきなのかということなどが述べられています。※オンラインで公開しています。詳しくは283ページをご参照ください。

山崎、吉川、吉田の翻訳チームは読みやすさに配慮しつつ、訳稿を作成してきました。手に取っていただき、日々の実践に活かしていただければ、ほんとうにうれしいです。もし、「いい本だな」と感じたら、どうぞ同僚の方々にも勧めてください。もしかしたら、この本が日本の教育現場における評価を変えていくきっかけになるかもしれません。そして、生徒たちにも「こんな評価のやり方があるんだけど、どう思う？」と尋ねていただきたいのです。

ぜひ、生徒の声を聞かせてもらいましょう！

最後になりましたが粗訳の段階で目を通し、フィードバックをしていたいた秋吉梨恵子さん、鶴飼力也さん、遠藤純平さん、三塚平さん、吉川光子さんに心から感謝いたします。また、本書の企画を快く受け入れてくださり、出版まで誠実に伴走してくださった、良知令子さんおよびさくら社関係者の皆さんにも心からお礼を申し上げます。

二〇二三年六月

訳者を代表して 吉川岳彦

第1章

エレベーター  
ピッチ

## 生徒中心の評価の方法とは？　そして、それはなぜ大切なのか？

テリー・オライリーの『私が知っていること（未邦訳／原書タイトルは参考文献リスト（285ページ）に記載の二次元コードから参照してください。以下同）』<sup>96</sup>は、マーケティングに少しでも興味がある人には必読の本です。また、マーケティングにあまり関心がない人も、今の生活を形づくる多数の広告や製品に関するストーリーを楽しむことができます。

この本は、オライリー自身が配信する人気のポッドキャスト「感化する力（Under the Influence）」でのエピソードや、そこから学んだことを元に書かれました。私のお気に入りのエピソードは、ステイブ・ジヨブズがジョン・スカリーをペプシコからアップルへ引き抜いた時のものです。

一九八二年、スカリーはペプシコの社長として確固たる地位を築いていました。彼は配送トラックの運転手として、この大企業でのキャリアをスタートし、一六年にわたって、同社で出世の階段を登り続けました。<sup>82</sup>

スカリーが社長にまで出世したのは、製品開発によるものではなく、天才的なマーケティングの才能によるものでした。<sup>99</sup>彼は、ブラインド・テイステイニングでペプシとコカ・コーラを言い当



てる「ペプシチャレンジ」の発案者です。そして、ペプシブランド全体の有力なCEO候補と目されてきました。

ジョブズは、スカリーがコカ・コーラから市場シェアを奪った効果的な手段を目の当たりにし、何としてもスカリーをアップルに引き抜こうと考えました。それは、彼がコンピュータ市場において同様の手腕を発揮し、アップルとマイクロソフトの明らかな差を縮められると感じたからでした。

残念なことに、スカリーはアップルに興味がありませんでした。ジョブズは、彼にとっても高額の給与と有利なストックオプションを提示しました。しかし、スカリーの心は揺らぎません。数か月後、スカリーはこの話にケリをつけるため、ジョブズと直接話し合いました。

「熟考したが、君のところには行かない。私はここに留まる。そして、東海岸ですべきことをする。だが、無償でアドバイスはしよう。友人になろう。でも、アップルには行かない」

普通の人なら、この時点で諦めるでしょう。しかし、ジョブズは「普通」ではありませんでした。明らかな拒絶であるスカリーの言葉を聞きながら、ジョブズは彼の耳元五〇センチのところまで歩み寄りました。そして、かの有名なセリフを口にしたのです。

「このままずっと砂糖入りの水を売りたいか？ <sup>82</sup> そうじゃなくて、私と一緒に、この世界を変えてみたくはないか？」

一週間後、スカリーはアップルで働き始めました。そして、一〇年後、アップルは世界で最も収益性の高いコンピュータ会社になったのです。

オライリーは、このエピソードを引用して、「エレベーターピッチ」の力と重要性を力説しています。「エレベーターピッチ」とは、アイディアなどを簡潔にまとめて、二〇秒もかけず伝えられるようにする手法です。

ロナルド・レーガンは、手強い対立候補であるジミー・カーターとの大統領選挙キャンペーンで、有権者向けのシンプルで効果的なエレベーターピッチをつくりました。「皆さんの生活は四年前より良くなりましたか？」と。<sup>96</sup>

オライリーによると、優れたエレベーターピッチには「簡潔で魅力的であること」「組織またはブランドの本質を反映していること」という基本的な性質があります。あなたが購入した製品、あなたが見た映画、あなたが読んだ本は、それらを買う価値をあなたに納得させるだけのエレベーターピッチをもっていたのでしょうか。

「エレベーターピッチは、明確さに到達するためのエクササイズです」とオライリーは言います。<sup>96</sup>それは、「短いほどよい」という金言の表れでもあります。そして、組織の全員が自分たちのミッション「使命」をすぐに理解でき、しかも説得力のある「フック「釣り針」となるように表現す

ることを勧めています。また、物事を詳しく説明したいという私たちの欲望に対して、「エレベーターピッチがパラグラフ一つ分を必要とするなら、それはまだできあがってはいません」と警告しています。

ジョブズは、優れたエレベーターピッチの力を誰よりも理解していたはずですが、彼は、アップルを次のように説明しました。

「アップルがいつも実現してきたことがあります。それは、ほんとうに複雑なテクノロジーを取り入れること。そして、それをエンドユーザーが簡単に理解し、使えるようにすることです」<sup>3</sup>

この言葉には説得力があります。それはおそらく、この本をMacで執筆し、iPhoneとApple Watchを所有し、Apple TVのサブスクリプションを購入する理由です。そして、ヴェンテージのApple IIc(1)の前を通ると、つい立ち止まって見入ってしまう理由でもあるからです。

私は、教師たちに自分の教科やクラス、勤務校のエレベーターピッチをつくってもらったら、どんなものになるだろうかとよく考えていました。たとえば、二一世紀の教育についての「エレベーターピッチ」はどうでしょうか？ 教師は、自分の存在理由のすべてを一文、もしくは二文にまとめることができるでしょうか？

(1) アップルが一九八四年に発売したApple IIシリーズのパーソナルコンピューター。

オーストラリアで開催された会議に出席していたとき、ジョン・ハッティは「汝の影響を知れ」という、彼のシンプルな探究を紹介してくれました。それは無駄がなく、パワフルで、教師へのフィードバックと密接に結びついていました。私はその探究を気に入りました。

アップルのような企業やハッティのような研究者の経験を元に、「教育において何をやるのか」ではなく、「なぜ教育に関わろうとするのか」ということから、私たちも考え始めるべきなのです。<sup>(2)</sup>

サイモン・シネックは、『WHYから始めよ!』の中で、自分たちがアップルのコンピュータを売ることを想像してみるよう勧めます。<sup>115</sup>そして、そのエレベーターピッチは次のようなものだろうと予測します。

「私たちは、すばらしいコンピュータを作っています。美しいデザイン、シンプルな操作性、使いやすさが特徴です」。これは一見ロジカルで、しかもアップル製品のエッセンスを説明しているように思えます。確かに、このエレベーターピッチは、コンピュータが「何」であるかを説明しています。しかし、アップルがコンピュータを「なぜ」造っているのかは説明していません。

本当に説得力をもつエレベーターピッチをつくることに成功している企業は、自分たちのビジ

ネスを明確に理解している、とオライリーは言います。それらのエレベーターピッチには驚かされます。たとえば、ナイキは靴ではなく「モチベーション」を、ミシユランはタイヤではなく「安全」を売っているのです。ハイネケンの天才的なマーケティングたちは、もはやビールを売っているではありません。「包容力」「節度」「寛容さ」を売っているのです。

このようなトップブランドにならって、教師も自分たちがしていることを明確にする必要があるのではないのでしょうか。そのときあなたは、自分たちがしていることは「教育」とは別のものであることに気がつくかもしれません。

学校で行われていることを「エンパワメント」と「エンゲージメント」<sup>(3)</sup>「夢中で取り組む」という新たな視点で見つめ直すことで、学校を変えることができるでしょう。アメリカの代議士で公民権運動の指導者であるバーバラ・ジヨードンは、「教育は、経済的にも政治的にもエンパワメントの鍵である」と宣言しています。<sup>65</sup> 考えてみれば、歴史上、教育はエンパワメントと密接な関係にあります。

(2) 協力者から「教師として、突き刺さる言葉でした。自身のアイデンティティーと言えるし、『自分が教師をやる意味』『交換不可能性』や固有性を示すものでもあるように思いました。こうした話を職員室でしたいです」というコメントがありました。

(3) エンパワーする、ないしエンパワメントは、「力を与える」や「権限を委譲する」と訳されることが多いのですが、本来は「人間のもつ本来の能力を最大限にまで引き出す」ことなので、本書ではカタカナを使いません。

ある時、私たちは、カナダのブリティッシュ・コロンビア州にあるサマーランド中等学校<sup>④</sup>のスタッフと一緒に、エレベーターピッチについて探究しました。アラン・ステル校長と私は「なぜサマーランド中等学校に通うのか？」という問いをスタッフに投げかけました。そして、職員会議のかかりの時間を割いて、スタッフそれぞれのエレベーターピッチをつくってもらいました。その結果、バラエティーに富んだ、とても魅力的なエレベーターピッチができました。

「サマーランド中等学校は、生徒がどのような道を選んでも成功できるように、スキルと自信をつける手助けをしています」

「サマーランド中等学校は、すばらしいチャンスにつながる多様性を確保できるぐらい大きく、同時に親密なコミュニケーションを取ることができるぐらい小さいです。私たちは、現状と古き良き伝統とをすべての分野においてバランスよく織り交ぜてカリキュラムを提供しています。それは、生徒たちが既知と未知のチャレンジに向かうための土台となっています」

「小規模で、必要な支援は何でも受けられる。革新的、創造的、そして柔軟で……まるで『チアー

ズ」のような場所。そこでは誰もがあなたの名前を知っている」

私自身も教育についてのエレベーターピッチづくりに取り組んできました。そして、少し前にとどり着いたのが次のような言葉です。

「私は、本物の学習体験と生徒中心の評価方法を通じて、生徒をエンパワーします。生徒が自信をもって学べるように、また、生徒たちがどのような状況にも対応できる人間になれるように、生徒と有意義な関係を築いていきます」

このエレベーターピッチを、私は一〇回以上も書き直してきました。しかし、何度書いても「評価」という言葉を削除することはできませんでした。そして、なぜ「評価」が生徒中心でなければならぬのかということも。

(4) カナダの学制は州によって異なり、アルバータ州は日本と同じ六・三・三制ですが、ケベック州は六・五制、著者が働いているブリティッシュ・コロンビア州は七・五制になっています。中等学校は五年制の学校のことです。

(5) チアリーディングに青春を掛ける高校生の、恋と奮闘を描くアメリカ映画。二〇〇〇年制作。

「評価」とは、学びについての本質的な言葉です。目的を確立し、学習目標を定義すること、そして生徒の成長を評価し、報告することまでを含むものです。ディラン・ウイリアムの言葉を借りれば、それは「教えることと学ぶことを橋渡しするもの」です。<sup>17</sup>

私は、自分の子どもたちに教え切れないほどのことを教えてきました。アイススケートをする  
こと、自転車に乗ること、トレーラーをつないだ四輪バギーをバックさせることなど。それぞれの  
経験には、目標や目標を達成するための基準、評価方法、フィードバックといった評価に関する  
項目がたくさん含まれていました。私がアイススケートで傷めた腰は回復しませんでしたし、  
子どもたちは四輪バギーの練習で、何度もおんしゃくを起こしました。そのまま放り出していつ  
てしまうこともあります。しかし、最終的に子どもたちはスケートを滑れるようになりました  
し、四輪バギーのバックも習得できました。評価すること自体はもちろん、そこに含まれるいろ  
いろなことのおかげです。

評価、すなわちアセスメント (assessment) の語源はラテン語で「隣に座る」という意味です。  
この「隣に座る」ということを、よく考えてみてください。しかし、世界各地の学校で行われて  
いる実際の評価は、このアセスメント本来の意味を反映しているとは思えません。非常に長い  
間、評価とは生徒と「一緒に」行うものではなく、生徒に「対して」行うものでした。生徒たち  
は、生気のない存在として評価されるべきではありません。学習プロセスにおいて、生徒は「従



業員」ではなく、「共同経営者」になる必要があります。

さらにいえば、これは生徒としてではなく、人間としての問題です。つまり、自分がどのようなスタンダード<sup>⑥</sup>を用いてどのように評価されるのか、さらには評価の結果について自分の意見を付け加えることができるのかを知りたいということなのです。実際のところ、もし、あなたが生徒だったら、次のエレベーターピッチにどれだけ興味を惹かれるでしょうか。

「こんにちは、みなさん。これからしばらくあなた方の授業を受け持ちます。そして、まあ来週ぐらいかな、それくらいにはみなさんを評価するつもりです。私がしっかりと教えたあと、その内容をどれだけ思い出せるかを他の人と比較し、点数を付けます。その点数は、あなたの将来を劇的に変えるかもしれません。がんばってください！」

ああ、言い忘れていましたが、あなたの行動や人との接し方、努力の具合などが、あなたが私の教えたことを理解しているかとは別に、点数に影響することもあるかもしれません」

(6) アメリカやカナダのスタンダードは、主に州レベルに決定権がありますが、日本におけるスタンダードは、文部科学省が出している学習指導要領といえます。これは特定の時期に知ることやできることが求められる「到達目標」であり、教師に対しては「指導事項」の形で書かれたものです。本書では「learning standard」という言葉も頻出しますが、それは「学びのスタンダード」と訳します。

こんなエレベーターピッチでは、あなたを（生徒も）惹きつけることはできないでしょう。この「エレベーターピッチ」は、私の教師としてのキャリアにおける、最初の一〇年間の評価方法を要約したものです。明らかに、これは変える必要がありました。

### **学習者を中心にした評価で助けになること**

学習者を中心とした評価モデルには十分な裏づけがあります。その一つが経済協力開発機構（OECD）によるものです。OECDは、「世界中の人々の経済的・社会的福祉を向上させるための政策を推進する」ことを目的とした国際機関です。オーストラリア、カナダ、イタリア、アメリカをはじめとする三〇か国以上が加盟しています。本部はパリにあり、情報経済社会における教育の新たな展開や問題に対して、各国政府が対応できるよう、この一〇年間活動してきました。

『革新的な学習環境に関するハンドブック』の中で、OECDがもつ、多国籍の研究機関は、学習環境をデザインするための七つの原則を提示しています。ありがたいことに、その中で「学校や教育委員会が、これら七つの原則すべてに同じ優先順位で取り組もうとするのは非現実的である」と述べられています。七つの原則の中から三つを抜き出してみましよう。これらは、私たち

の目的である「生徒が評価において中心的な役割を果たすことを支援する」ためのものです。

・評価において中心的な役割をもつのは、学習者であると周囲が認識する。

・学習環境においては、学習者の個人的な違いに敏感に対応する。

・学習環境は、学習者に期待される明確な目標をもって運営される。また、それらの目標と一致する評価方法が展開される。<sup>97</sup>

ハッティは、生徒の学力に影響を与える要因の研究をまとめた『学習に何が最も効果的か—メタ分析による学習の可視化【教師編】』という画期的な本の中で、一五〇の要因について順位づけをしています。<sup>60</sup>

その中で、学力に影響を与える最も大きな要因は、「生徒の自己報告による成績評価」です。つまり、生徒は自分の理解度や達成度を信じられないほど正確に予測しているということです。ハッティは、それについてシンプルな言葉で語っています。「生徒を評価するとき、それに最もふさわしいのは生徒自身なのです」<sup>98</sup>

評価についての会話で最も重要な主体は生徒であるということを研究は示唆しています。しか

(7) 訳者の一人である、吉田新一郎の著書『テストだけでは測れない!』も参考になります。「評価は、必ずしも教師によってのみ行われることが効果的なわけではありません。一番大切なのは、自分が自分のことを分析して納得する『自己報告』でしょう。たとえどのような評価を周りの者が下そうが、最終的には、良くするも悪くするも各自の判断ですから」(38ページ)とあります。そして、実際にそれが行われている事例が126〜130ページで詳しく紹介されています。

し、従来の評価モデルの多くが、生徒の声をほとんど無視しているのはなぜでしょうか。ここで生徒の声を聞くことが何をもたらすのか考えてみましょう。

ウィリアムは、『埋め込まれた形成的評価（未邦訳）』の中で、生徒のニーズに応じた教育を行うべきだと力説しています。これは生徒が評価に関わらない場合には不可能なアプローチです。<sup>◆17</sup>彼は、評価システムの基礎となる五つの要素を挙げています。そのうち次の三つが生徒自身による評価に関連します。

- ・ 学習意図や目標を達成するための基準を明確にし、共有し、生徒が理解すること。
- ・ 生徒がお互いを教え合い、学び合う人材として活発に活用し合うこと。
- ・ 生徒が自分自身の考えをつくり出すのを促進すること。

生徒が評価に参加することは、大きな副次的効果ももたらします。『プロジェクト学習をデザインする（未邦訳）』の中で、著者のマイケル・マクダウエルはこう強調しています。生徒の成長の支えとなるのは自分自身の成長を把握し、より高い達成のための行動を選ぶことだ、と。<sup>◆84</sup>OECDの原則や、ウィリアムが示した要素と同じく、マクダウエルは「自らの成長を評価できる学習者」を育てるために、学習者自らが次のように問うことを勧めています。

・私はこの学習によって、どこへ行こうとしているのか？

・私は今、学習のどこにいるのか？

・自分の学習について、改善すべきことは何か？

・自分や他の人の学習を向上させるにはどうすればよいか？<sup>(8)</sup>

生徒を評価に関わらせることは、やる気、自信、自己管理能力、パフォーマンス<sup>(9)</sup>の向上につながります。評価のための面談の際、生徒が中心にいななければならないのはなぜかということについて、コニー・モスとスーザン・ブルックハートは説得力のある議論を展開しています。<sup>◆90</sup>

「学習を自分のものとして考える生徒は、決定したことや作業の結果を自分の責任として引き受けられます。これは、学習の評価や自己管理能力、そして自らが有能な学習者であるという認識を徐々に高めることにもなります。その結果、学習へのモチベーションも高めることになる

(8) 以上の四点を分かりやすく図化したものがあります。それは評価の本質を描いたものでもありません。入手希望者は、訳者の吉田が主宰する [pro.workshop@gmail.com](mailto:pro.workshop@gmail.com) 宛にお問い合わせください。

(9) 第3章の「ルーブリックは何のためにあるのか？」(90～94ページ)をご参照ください。

のです」

これらの研究成果をさらに掘り下げてみると、生徒が評価に関わることは、やる気や自信を高めるだけに留まらないことが分かります。生徒が評価の要素を理解し、さらにその目的を理解することは、パフォーマンスの向上に直接関係してくるのです。<sup>◆16</sup>

生徒が評価について以下のように考えている場合、評価とパフォーマンスの間にはポジティブな関係があります。<sup>◆17</sup>

- ① 評価は、正しく成績を決定するのに役立つ。
- ② 自己管理能力の向上に役立つ。
- ③ 教師が教え方を修正したり改善したりするのに使われる。

一方、もし生徒が、評価について、因果関係が不明なもの、実体のないおべっかのようなもの、生徒自身がコントロールできない外部要因を反映しているもの、学校自体の質に関係しているものと認識している場合、生徒のパフォーマンスは低下します。<sup>◆15</sup>

## 生徒の声と選択——生徒を中心にした評価の鍵となるもの

評価「アセスメント」が「隣に座る」ことを意味するのであれば、文字通り、自分の椅子をテーブルの反対側、すなわち生徒の隣に移動させて、語り合う必要があります。テーブルの向こう側から、学習成果を挟んで、何が正しくて、何が間違っているのかを伝えるのではなく。

評価とは、学習目標に対してどのようにアプローチし、どのように評価し、どのように表現するのがベストなのかを教師と生徒が一緒に考えるプロセスなのです。

生徒にとって理想的なのは次のようなことです。

- ・ 一定の期間内で自らの理解を表現できること。
- ・ 実例を挙げ、課題やそこから学んだことについて説明できること。

このように、教師と生徒が学習<sup>⑩</sup>における真のパートナーになったら、どんな変化が起こるかを想像してみてください。

(10) ここでの学習には評価も含まれます。というか、同義として捉えられています。

## 声のパワー

ラッセル・クワグリアとマイケル・コルソーは、『生徒の声——変化の手段（未邦訳）』という本の中で、先に述べた生徒と教師のパートナーシップは、生徒の声を元にしてつくられるべきだとしています。生徒の声は実際的で価値のあるものなのです。教育者として、生徒の声に耳を傾けていると私たちは思うかもしれません。しかし、クワグリアらは私たちの伝統的なアプローチに疑問を投げかけ、変革のための課題を提示しています。二人はこう書いています。

「確かに、学生の抗議行動、デモ行進、座り込み、授業放棄などがありました。しかし、私たちが言っている『声』とは、純粹な意見、本当の意見の表明のことです。これは、何かに反射的に反対するといった『声』ではありません。むしろ、学習において、より高いレベルを達成するために主体的に意見表明する『声』なのです。ここでは、純粹な声、本物の生徒の声について——言い換えれば教師が生徒に意見を求め、その言葉にほんとうに耳を傾けることについて語っているのです。それは、生徒が学んだことを教師たちが受け入れること、そして、生徒たちを教室と学校における学びのリーダーとすることなのです」



生徒の声は、とても力強いものになりえます。二〇〇九年から二〇一八年までの一〇年間に、クワグリア・インスティテュート<sup>(11)</sup>が、三四州、八二〇校の四五万人以上の生徒を対象に調査した結果、生徒が自分の声を発信しているとき、次のようなことが起こることが分かりました。<sup>(12)</sup>

- ・学校で自分の価値を実感する可能性が三倍高くなる。
- ・学校生活に夢中で取り組む可能性が五倍高くなる。
- ・学校で目的意識をもつ可能性が五倍高くなる。

生徒の声は、学習において強い力を発揮します。しかし、それにもかかわらず、生徒の年齢が上がるにつれて、教師とのパートナーシップが維持できなくなることを統計は示唆しています。二〇一二年から二〇一三年にかけて、ピアソン財団は、六年生から一二年生までの六万人弱の生徒を対象に「自分の声」と名づけた調査を実施しました。この調査によると、中学に入学したばかりの六年生の六一％は「自分の声を発信できる」と感じていました。しかし、一二年生に

(11) 生徒、教師、管理職、保護者の声を教育に活かすことを目的にした非営利研究所です。

(12) アメリカの高校は九〜一二年生までの四年間と決まっていますが、中学校は教育委員会によって七〜八年生、六〜八年生、小中一貫などさまざまです。日本の学年に合わせることはできないので、本書では一二年間の通しの学年表記にします。

なると、それは三七%にまで減りました。また、「学校での意志決定において生徒に発言権がある」と感じているのは四六%にすぎず、「教師が生徒から学ぼうとしている」と考えているのは半数<sup>(13)</sup>強にすぎないという結果も出ています。<sup>◆iii</sup>

もし、私たちが立ち止まり、充分かつ真剣に生徒の声に耳を傾ける時間を取るならば、生徒たちは今何が起きているのかを教えてください。生徒たちが求めているのは、自分の学習に関する考えや意見、反省点を共有する機会と手段です。あなた自身が話しているとき、生徒の話聞くことはできません。私たち教師はたまには話すのをやめて「生徒の声に耳を傾ける時間をつくる」必要があるとハッティが主張するのは、そのためかもしれません。

本書では、評価プロセスのすべての段階で、生徒の声を取り入れる方法の具体例を示します。また安心できる環境の中で、共有と振り返りを行う方法を探究します。生徒をエンパワーし、生徒の声を歓迎する評価ツールや方法を紹介します。たとえば、私のクラスで「シェアリング・サークル」を取り入れたところ、サークル自体や活動後の会話など、教室の学習環境が一変したのを経験しました（シェアリング・サークルについては、228〜240ページを参照してください）。

生徒の声に耳を傾けることで教育実践にどのような変化がもたらされたかを、多くの教師から教えてもらいました。

ここで、ミネソタ州のある教師から聞いた例をお話ししましょう。

彼女の娘とその友人は一緒に宿題をしていました。娘はある疑問で立ち止まり、友人に数学の重要な概念を説明しようとした。彼女が説明を始めようとしたところで、友人が話を遮りました。「ねえ聞いて、私にはそんなことを学んでいる時間はないの。私に必要なのとはにかく宿題を終わらせることなの」

いままでの宿題のやり方を変える必要について、これ以上の「エレベーターピッチ」があるでしょうか？ 繰り返しします。私たちは、ただ立ち止まり、生徒たちの声にほんとうに耳を傾ける必要があるのです。

さらに最近では、学習体験について生徒の話を書くことが、教師以外の人々の間でも課題となっています。たとえば、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの時期における家庭学習では、保護者が子どもの教育の最前線に立っています。保護者が、カリキュラムを提供したり、学習目標をどれだけ達成したかを評価したりするのです。おそらく、現代の教育において初めて、大勢の親が、子どもが学んでいることについて、その考える過程に直に触れ、子どもにとっての「価値

(13) この数字は重いです。多くの教師にとって、生徒から学ぶという意識はとても低いのです。教室で困難を抱えたとき、教師はその解決策を生徒に聞こうとはしません。生徒にとっても、教師にとっても、これは実にもつたいないことです。でも、最後の数字は、予想以上に高いと思いませんか？ 同様の調査を日本でもしたら、あなたはどのような数字が出ると思いますか？

値のある困難<sup>(14)</sup>」を目の当たりにしています。そして、子どもが問題について考えるのを助けることが、答え合わせ以上に大切なのではないかということに気がついたのです。

妻のトレーシーが当時一〇年生の息子、エリアの数学を教えるために苦心<sup>さんたん</sup>惨憺<sup>さんたん</sup>している間、私は「敵前逃亡」していました。世界的に見ても、コロナ禍の長期的な影響には興味を惹かれます。なぜなら、世界中の親たちが、学習をどう語るかについて考えないわけにいかないからです。わが家を例にとるなら、「宿題は終わったの?」「今日は学校で何をしたの?」といったお決まりの質問から進化するかもしれません。何百万もの親とその子どもたちは、何を、どのように、そしてなぜ学ぶのかについて、より洗練された会話を求めるようになるかもしれないのです。

生徒は、自分の学習状況を報告できる唯一の存在です。ですから、生徒たちに問うことは必須です。ブリティッシュ・コロンビア州サーモンアームで数学を教えているデイヴ・ファン・ベルゲイク先生に初めて会ったとき、彼が微積分を選択した生徒一人ひとりと会い、たくさんの「証拠」と会話に基づいて、成績を決めていることを知りました。私は即座に言いました。「ほんとうに? あなたは生徒と交渉して最終的な成績を決めているのですか?」と。数学のベテラン教師が生徒との会話によって成績を決めているなんて驚き以外のなにもありません!<sup>(15)</sup>

ファン・ベルゲイク先生と出会って間もなく、何人かの同僚と私は、非公式に「会話ベースの

成績評価」というシステムをスタートさせました。私が、授業科目である「リーダーシップ」の生徒に自分の進歩についてコメントする機会を初めて提供したのとはほぼ同時に、同僚のマーニー・メネル先生も「食品」の授業を受ける生徒に自分がよくできたことや、課題を共有するよう求めていました。トロイ・スタバート先生は「自動車と金属」の授業で、生徒に自己報告の機会を与え、レイチェル・スタバート先生は数学の生徒に形成的評価と総括的評価の両方<sup>(16)</sup>で進捗状況を追跡し、自己報告できるような門戸を開きました。この時には、私たちが新たな世界を切り開いているように感じました（本書では、このような変化を反映したワークシートや資料が数多く紹介されています）。

私は、サマールランド中等学校の生徒が自分の学習について自己評価することが良い影響をもたらしているのではないかと思い、彼らに質問してみました。その回答の一部を紹介します。

「単に自分はどのくらいできているのかということや、先生が想像した私の考えを示す通知表が（14）苦勞して物事を思い出したとき、それは記憶に深く、はつきりと刻み込まれます。このように苦勞して思い出すこともたられる長期的な学習への効果をロバート・ビョークは「価値のある困難」と呼んでいます。◆<sup>11</sup>

（15）ファン・ベルゲイク先生については24ページからも参照してください。

（16）形成的評価と総括的評価についてはC・A・トムリンソン、T・R・ムーン著、山元隆春他訳『一人ひとりをいかに評価し学ぶ方・教え方を問い直す』で分かりやすく説明されています。

返却されるだけではありません。先生に実際に何が起こっているのかを理解してもらえます」

(ザビエル)

「私は自分のことを知っていますが、先生たちは私のことを知っていると思っているだけです」

(モーガン)

「私が自分のことを知っているようには、誰も私のことは知りません！」(マレイナ)

生徒たちのコメントには説得力があります。本書は、学習に関するすべての会話——とりわけ評価に関するもの——に生徒を参加させ、エンパワーすることを目的としています。生徒たちが理解したことを明確に表現、評価し、報告する機会がつくられる時がやってきました。教師にとって、今がその時です。今こそ、生徒の声を聞く場をつくり出すべきなのです。

### 選択の重要性

エンパワーメントと夢中で取り組むという観点から見ると、声を発することと選択することは切り離せない要素です。<sup>(17)</sup>それは、私たち全員に当てはまります。二〇世紀は、職業や教育の機会、食べものやエンターテイメントなど、さまざまな分野で選択肢が爆発的に増えました。私自身の

人生をたどってみるだけでも、選択肢の広がりには驚かされ、いささか呆然とさせられます。子どものころ、私は三つのテレビ局を「チャンネル・サーフィン」していました。賭けてもいいですが、私は「サウンド・オブ・ミュージック」を八回は観ているはずで、ほかにも選肢がなかったのです！ 私の子どもたちは、どうして私が「ドレミの歌」を暗唱できるのか、理解に苦しんでいるかもしれません。「ファはファイトのファ」と歌えることには、限られたテレビチャンネルが大いに影響しています。「ドレミの歌」を同じように歌えるあなたも、同じように選肢が限られていたのではありませんか？ 今では、観たい番組を何百ものチャンネルから選ぶことができますし、動画配信の選肢も多すぎます。

生徒たちは、選肢であふれている世界を生きています。しかし、学校はその例外です。ゲイル・グレゴリーとマーシャ・カウフェルトは、『意欲的な脳（未邦訳）』の中で、年少の学習者の多くが、全日保育所や幼稚園のもつ、探究的な特性から恩恵を受けていると指摘しています。<sup>52</sup>しかし、そういった子どもたちが得ている語彙の増加や社会性の向上などの学習効果の多くは、高校生になるまでに消えてしまいます。それは一く八年生までの「講義形式」のやり方によるものだと示

(17) これらの要素について興味のある方には、『あなたの授業が子どもと世界を変える——エンパワーメントのチカラ』がおすすめです。

唆しています。<sup>18</sup> おそらく、今は保育所や幼稚園の実践から学び、教室で生徒に選択肢を提供することで、学びを活性化するときなのでしょう。<sup>(18)</sup>

「声を発すること・選択すること」を生徒に提供することについて、基本的に議論の必要はありません。エンパワーメント、夢中で取り組むことに「声を発すること・選択すること」がどのような役割を果たすか、自分自身のこととして考えてみてください。私たちは、型にはまった環境ではなく、自分の声が尊重され、選択肢が与えられる環境を選ぶのです。

## この本の構成

生徒を中心とした評価へのアプローチは、始めから終わりまで論理的で明確なステップを踏むべきです。もちろん、その過程で創造性を発揮する余地は十分あります。本書では、生徒を中心とした、基本的・実践的な評価計画を示します。次章以降では、次のような具体的な事柄を説明します。

- ・生徒中心の学習目標を生徒と共につくり出し、共有すること。
- ・目標達成のための基準と継続的なパフォーマンス評価を提供するために、スタンダードと



結びついたルーブリックを使うこと。

- ・信頼性が高く、公正で、良識的な成績評価システムを考案すること。
- ・生徒が評価について自ら語る仕組みを設計すること。<sup>20)</sup>

それぞれのテーマを取り上げながら、従来の評価方法の問題点を指摘していきます。そのテーマ内で、生徒を中心とした評価システムを支える研究やコンセプトについても考えていきます。また、小・中・高の各学校で教師が生徒をエンパワーし、夢中で取り組ませている事例や、生徒中心の評価を形成するためのツールを紹介します。生徒の声や選択、自己評価、自己報告をどの程度採用し、促進しているかによって、個々のツールやアイデアを、私たちは絶え間なく検討

(18) ここに書かれていることについて、詳しくは下の二次元コードで読める情報(PLC便り・二〇二二年一二月一八日 特に、一番下で紹介されている二つの動画)をご覧ください。

(19) ここで「目標達成のための基準」と訳した「success criteria」は、目標に対する達成度を測ると同時に、目標達成を実現するための方法も提供する基準のことを指します。

(20) 単に、生徒が自分の成績を教師に伝えることを越えた、保護者や他の人にも自分の学んだことを説明し、新たな目標までも表明するような場として捉えたいです。それを一番イメージしやすいのは、「生徒中心の三者面談」です。通常の教師が話し役になって、生徒と保護者が聞き役になるようなものと違い、主役は生徒です。これについて詳しくは、「(増補版)考える力」はこうしてつくる」(特に、168〜170ページ)をご参照ください。



することになるでしょう。



最初のエピソードに戻ります。もしあなたがスカリーの立場だったら、ジョブズの問いかけを無視することができたでしょうか？

「このままずっと砂糖入りの水を売り続けたいか？ そうじゃなくて、私と一緒に、この世界を変えてみたくはないか？」

拡大解釈で恐縮ですが、私たちは自分自身にも同じような問いかけをすべきかもしれません。「私たちは、テストや採点、成績の通知などの大事な作業から子どもたちを閉め出し続けたいのか、それとも、評価の領域に子どもたちを真剣に参加させる方法を探究したいのか」と。

評価の過程の中で、生徒をエンパワーすることができます。私たちは、なぜ生徒を中心にした評価が重要なのかということを示した後、どのようにしてそれが実現できるのかを探究する必要があります。その意味で、この本にはエレベーターピッチが必要でしょう。私は次のように提案します。

私たちは、評価のもつあらゆる可能性を通して、生徒を学びに熱中させ、エンパワーします。そのためには、生徒自身の声、選択すること、自己評価すること、自己報告が不可欠です。

生徒たちに今こそ語ってもらいましょう！